

第3回環境被害に関する国際フォーラム

基調講演

第3回国際フォーラムの課題：失敗の教訓を将来に活かす

花田 昌宣*

熊本学園大学水俣学研究センター長

水俣学研究センターの花田です。私の報告の基調は、水俣病問題の「解決」あるいは「将来構想」をどう考えていくのかということなのですが、議論の基本は、被害者の尊厳を大事にすること、そして多くの人々の共同の決定が重要だということです。くわえて、水俣で水俣病問題をめぐって何が起きているかということもお話します。

水俣病の解決策を考えていくという点についてですが、国や県レベルでいろいろな委員会が立ち上げられたりしました。2010（平成22）年には宮本先生が紹介された「環境まちづくり研究会」（座長・大西隆東京大学教授）が作られました。これは地域の社会経済構造の将来像を考えようという検討会で報告書も出されています。ただ、私の知る限り、この種の会議や委員会の中に、被害者団体が入ることは一度もありませんでした。「環境まちづくり研究会」ですが、東京大学ばかりではなく九州大学、熊本大学、熊本県立大学、東海大学、中央大学などいろいろな大学の研究者も集めましたし、チツソや肥後銀行も入っています。ただ、患者団体と水俣市内に研究センターを置いている熊本学園大学だけ入りませんでした。水俣病の事あるいは水俣のことを研究していない大学の先生達が多く来ていましたが、わたしたちのところには案内さえ来ていない。私たちは、それまで地域戦略プラットフォームという市民協働の研究会を作って活動をしていましたので、この研究会に呼ばれた先生方の中でおかしいと思った方々もおられ、連絡もいただいたのですが、私どものほうからあえて問題にすることはありませんでした。

失敗の教訓を将来に活かすとは

さて、私のテーマは「失敗の教訓を将来に活かす」という話です。水俣病の発生が確認さ

*1952年大阪府生まれ。京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得退学。パリ第7大学経済学研究科高等研究学位取得、フランス国立東洋言語文化研究所日本学科専任講師、ルーブル大学国際貿易学部専任講師、パリ第13大学経済経営学部専任講師を経て、1994年より熊本学園大学社会福祉学部教授。2007年より水俣学研究センター事務局長、2012年より水俣学研究センター長を務める。熊本県部落解放研究会会長、社会福祉法人くまもと障害者労働センター理事長。1974年より水俣病問題に取り組み、故原田正純教授らとともに、水俣、カナダをはじめ様々な調査をおこなう。水俣病以外に、障害者問題、ハンセン病等についても人権の視点から研究を行っている。さらにフランスの社会的経済について共同研究を進めている。

れて63年になります。世代でいうと二つの世代を経たことになります。しかし今なお解決していない。どんな問題があるのかをいくつか挙げますと、大量の水銀が埋まっている水俣湾の埋め立て地の問題、認定されていない患者の補償や救済、そして、水俣病に対する偏見や差別の問題などです。これらの問題は海外、世界中で起きているさまざまな公害事件と共通するところがあると思います。だからこのような国際的な集まりを持って議論をしていきたいと思います。

例えば、中国の文明の発祥の地といわれている淮河（黄河と揚子江の間の大平原を流れる大河）における環境汚染の問題です。「癌の村」と言われていて、健康を奪われた人々がたくさん住んでいるコミュニティがいくつもあります。フォダイシャンさんの報告がありますが、そこで今課題になっているのは、川を浄化していく、健康を取り戻していく、生活を取り戻していくということで、市民グループによる取り組みがなされています。

カナダですが、今回、二つの先住民のコミュニティから来て頂いています。ここで公害事件が発生しており、垂れ流された水銀によって健康が奪われています。カナダでの報道を見ますと、昨年からの汚染された水系の浄化の試みが始まっています。つまり、被害に対する賠償からはじまって、環境そして生活を取り戻す試みが海外でもなされている。それについては日本の公害被害地でも考えていかないといけない。こういう話になっていくと思います。

私たち水俣学研究センターがなぜこういう集まりをするかという、晩年の原田正純先生と一緒に考えていたことから始まります。この写真（写真）はカナダの先住民居留地の一つのグラッシーナロウズのヘルスセンターで検診している際に事務所で撮ったものです。2010（平成23）年です。これが原田先生の最後のカナダ訪問になりました。



写真 2010年カナダグラッシーナロウズでの原田先生

水俣学研究センター撮影

原田先生が考えていたことは、公害の問題、環境問題を考えるに当たって現場が大事ということでした。そして住民が、専門家ではない住民が加わることが大事。そのうえで、国際的に繋がるのが大事だと言っておられました。

国際的に繋がる

国際的に繋がることを考えて世界の14カ国・地域から集まって、2006年に第1回目の環境被害に関するフォーラムを開催しました。繋がっていたのは、カナダもインドネシアも韓国も台湾も中国、いろんな国々の原田先生のネットワークによるものでした。

その後私たちも原田先生と一緒に少しずつ日本国内、海外の公害発地域を回りました。そして私たちが回るだけではなくて、そこで出会った人々と集まって、そして横に繋がって、いこうということが私たちの試みであります。今回の第3回の国際フォーラムもそういう意味を持っています。

最終的な到着点ですけれども、国際交流、こういった意見交換を私達が目指す将来をどう作っていくかという議論にしたい。「被害を受けた人達の健康と権利の回復。そこから更に公正と正義を実現していく」、この研究集会の根本的な目標はこれです。そのために意見の交換、そして情報の共有を行い、そのうえで共に汗を流していきましょう、ということが課題になっていくと思います。

明日は移動日ですので、もし水俣に明日から行かれるのであれば、チッソの旧工場、最初の工場を見に行かれてはどうでしょうか。昔の建物としてはこれだけしか残っていません。100年前の工場です。今、水俣病を引き起こしたチッソの工場、いろんな所が少しずつ壊されていって、どこで水俣病が起きたか分からなくなりつつあります。

水俣に行かれた方は分かると思いますが、水俣病についての看板は水俣の町の中にはほとんど立っていません。長崎、広島に行きますと、原爆ドームがあり、ここが被爆の土地である、場所であると、いろんな看板、掲示板、記念碑などが立っています。水俣に行きますとほとんど目にするがありません。水俣の鉄道の駅を降りますと、水俣病についての看板は1つもなくて駅前に地図があります。その中に、国立水俣病総合研究センター、水俣病資料館の2つが書いてある。これだけが水俣の駅前にある水俣病を示す看板。だから何も知らずに訪れると、何もなかった町のように見える。ただ、こうした工場の跡がいくつかあります。そうしたことから考えていく必要があるかなと思います。

水俣病事件における失敗の数々

それで、先ほどの宮本先生の話と少し重なりますけど、これだけはお伝えしておきたい。水俣病事件の失敗は何だったかというのを数えました。8つあるかと思います。

(1) 水俣病の被害の発生防止。予測できていた。

もちろん一番最初は予防原則というものがなかったので、水俣病の被害が発生した。この事実が第一の失敗です。2千何百人という認定された患者さん達。あるいは6万人あるいは7万人といわれる被害者。こんな大きな公害事件が実は発生してしまったということが第一にあげられます。

(2) 被害、汚染拡大防止措置を取らなかった。

発生しただけではなくて、水俣病が発生したことが分かった後からでも、拡大防止策が何も取られなかった。水俣病事件の歴史の中で、政府や行政が工場に対して「排水を止めなさい」と命令をしたことは一度もありませんでした。工場排水が止まった1968（昭和43）年まで水俣病の発生が分かってから12年間、工場は有機水銀を含んだ水を流し続けて

いたのです。

- (3) 被害者への補償・救済ができていない。

被害者総数もわかっていない、部分的にしか救済されていない。

そして、被害者に対する補償や救済がきちんと出来ていないという事実があげられます。そもそも、あの地域全体で水俣病の被害者が何人いるか分かっていない。現在認定された患者数（2,300人程度）、救済策による給付を受けた人数（全体で7万人程度）が発表されていますが、それらは全て本人が名乗り出たもので、まだ隠れている方々はかなりの数に上ると考えられます。

- (4) 情報の秘匿。

その背後にあるのは情報を隠しているということがあるものと思われます。

- (5) 調査の不十分さと記録隠し。

くわえて、調査が不十分、あるいは調査のデータを明らかにしないというような事が起きている。

- (6) 被害地域、被害者の住む地域の再発展。

宮本先生が既に指摘されたことですが、被害地域の社会的な発展、経済的な発展が考えられなければなりません。被害者救済と並んで地域の発展は国の政策だったはずですが、経営破綻しているチッソ支援ばかりに目がいていて、内発的な発展、住民主体の開発がどこまで考えられたのでしょうか。

- (7) 被害・公害を繰り返さないこと 繰り返し起きている。

そして何よりも被害、公害を繰り返さないことです。ところが水俣病の場合には熊本で1956（昭和31）年、水俣病が起きたことが分かった。それから10年後に新潟で水俣病が起きてしまった。実は同じ頃中国、黒竜江省でチッソと同じ工程を持っていた工場が原因で水俣病が起きています。水俣で1956（昭和31）年に明らかになった後も、色んな国で色々な公害が次々に起きている。これも失敗の原因というふうに思います。

- (8) 海外での公害事件の発生。

水俣病以降も各国で公害が発生しています。水俣病の失敗を開発途上国を中心に海外に早く伝えていけば、抑えることのできた公害事件もあったのではないのでしょうか。

今、8つの失敗をお話ししましたが、これは水俣病だけに限ったこと、日本だけに限ったことでしょうか。今回参加されている中国や韓国にも共通するところがたくさんあるでしょう。だから水俣病の失敗の教訓を考えていく必要があるのです。

最後に、「水俣病公式確認60年アンケート調査」についてふれます。これは、今日初めて公開したものです。私共が2年前の2016（平成28）年にアンケート調査をした結果報告です。

どういう調査をしたかという、水俣病の被害者達約8,900人に郵便で調査票を送ったものです。調査対象者が多いのですが、水俣病の被害者の団体に加入している人々全てに対して送るとこれぐらいの数になりました。回収できた数が2,619。被害者に対して直接こうし

たアンケート調査をしたのは、実は水俣病の研究の歴史の中では初めての事です。

公害事件による差別と偏見：大規模アンケート調査より

このアンケート調査では、健康状態から社会生活、将来への期待など様々な質問がありますが、一つ重要なポイントを紹介します。それは、水俣病における差別と偏見という話であります。水俣病を抱えている水俣、その周辺の地域、そこから離れた人も含めてですけど、多くの方が自分の水俣病のことを他人に隠していて、語ることが出来ない。子供や孫にも語らないという現実が浮かび上がってきました。

なぜか。水俣病に対する偏見、蔑視がなお強いということなのです。水俣病は地域で起きています。水俣市あるいは隣の市町村。水俣病の被害者がたくさんいる地域でもなお水俣病に対する偏見が根強いのです。

2つだけ表を出して説明します。

「水俣病の被害を受けてつらかったこと」という設問に対する回答の中で（図1）、「水俣病に対する差別や偏見」が19.2%、「世間に無視される」「無関心である」が14.5%あります。「自分の子供が水俣病だったらどうしようかという心配」（30%）という回答も実は差別や偏見を恐れてのことだろうと考えられます。回答票の中には、たぶん高齢の方が一生懸命書かれたと思われるのですが「ニセ患者」と陰口を言われたというのもありました。補償金や一時金をもらったことを非難される、すなわち被害を受けて補償や救済を受けたことを非難される経験を多くの方がしています。犠牲者が非難されるという逆転したことが起きていると言えましょう。

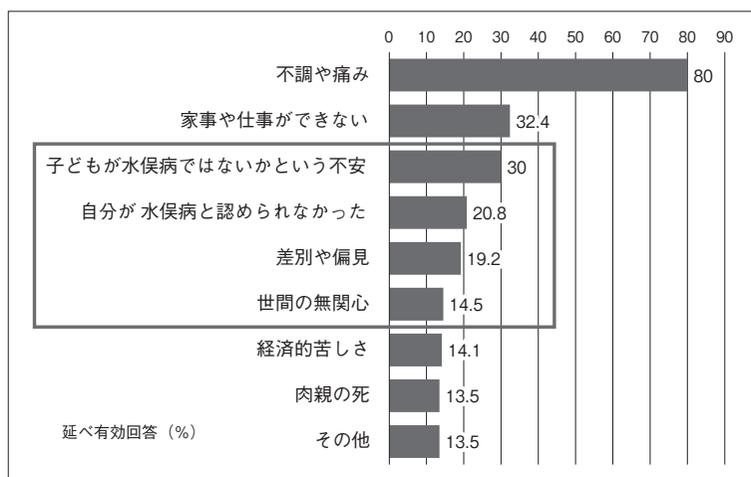


図1 水俣病被害を受けてつらかったこと

出典：『水俣病公式確認60年アンケート調査 最終報告書』2019年より作成

水俣病患者さんは「家族内でしかしゃべれない」とよくいわれます。そこで「自分の被害の経験を誰にしゃべっているか」というふうな設問を置きました。そうしますと、「夫や妻の間だけで話している」人が30%、「子供や孫と話している」人が20%、50%の人が「家族の中だけでしか話せない」、「誰にも話したことがない」という人が5.9%、「近所の人に話せる」人は5%ぐらい。水俣病について何故しゃべれないのかな、というふうに思いますけれども、やはり差別や偏見が怖い、誹謗中傷が怖い、理解してもらえないとは思っていない。これが今の水俣病に対する見方だと思います。

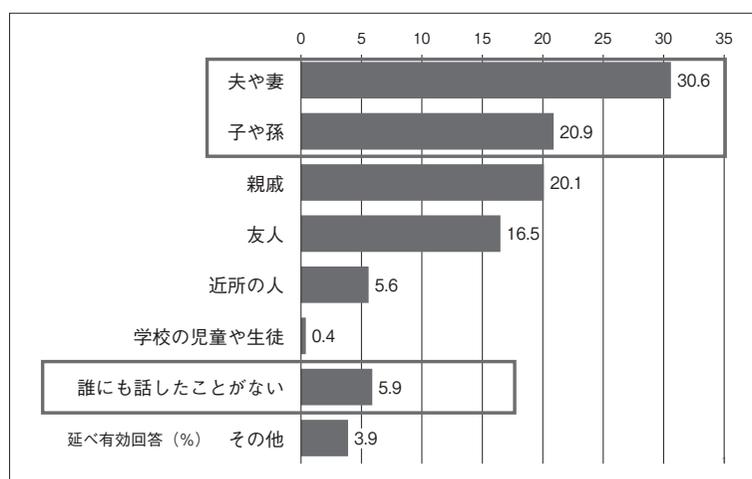


図2 水俣病被害の経験を話した相手

出典：『水俣病公式確認60年アンケート調査 最終報告書』2019年より作成

このような調査結果をみておきますと、水俣病問題について60年経って何か前進したかな、何か解決したかなとすら思います。私たちがアンケートを取ったうちのなんと4分の3が「水俣病問題は解決していない」と答えています。これが被害者達の実感です。

最後にこういった調査に基づいて、私たちは将来の構想を考え多くの人と共有していきたいと思います。その原則は何かというと、公開、公正、そして被害者の尊厳です。これを大事にして考えていきたい。こういったことがこの2日間の国際フォーラムのベースになればいいと思っています。ありがとうございました。

参考文献

- ・原田正純、花田昌宣編『水俣学研究序説』藤原書店、2004年。
- ・原田正純、花田昌宣編『水俣学講義 第4集』日本評論社、2008年。